Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2000, Vol. 47, 103 − 116.

青年の自己愛傾向と異性関係

――異性に対する態度，恋愛関係，恋愛経験に着目して――

小　塩　真　司[1)]

問題と目的

自己愛という概念は，古代ギリシアのナルキッソス神話に由来し，Freudによって精神的な病理を説明する用語として用いられるようになったものである。そしてその後の理論的変遷の中で自己愛の意味は拡大し，人間の心や行動における普遍的な，正常な人格特性のひとつであるともみなされるようになってきた。特に近年，自己愛的な特性が青年に顕著にみられることや，現代青年の特徴として自己愛的な傾向が強くなってきていることが指摘されている（福島，1992; 町沢，1998; 中島，1998)。このような青年期における自己愛傾向とは，自分自身への関心の集中と，自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚，さらにその感覚を維持したいという強い欲求によって特徴づけられる（小塩，1998a)。

自己愛に代表される自分自身に向けられる愛と，異性をはじめとする他者に向けられる愛との対比は，古くから多くの研究者の関心を集めてきた問題である。Freudは，愛はリビドーの発現であり，リビドーは他者に向かうこともあれば自分自身に向かうこともあり，他者に向かうリビドーは他者愛となり，自分自身に向かうリビドーは自己愛となると考えた。このように初期の精神分析学では，他者愛と自己愛とは，互いに排他的であると考えられていた。またFromm（1956）は，利己主義と自己愛を分けて論じ，他者への愛と自分自身への愛は二者択一のようなものではなく，自分自身に対する愛の態度は，他者を愛することのできる人すべてにみられると指摘した。このような理論的変遷の中で，次第に自己愛と他者愛が必ずしも排他的な関係にあるわけではないと考えられるようになってきた。近年ではKohutのように，正常な恋愛関係でもいくらかの自己愛的要素が関与しているという指摘もなされるようになっている（エルソン，1989)。

青年期は異性への関心の増加に伴い，様々の恋愛を経験していく時期である（宮下，1996)。恋愛や異性交際は青年にとって重要な対人関係であり，心理学にとっても研究意義の大きい現象であると考えられる（松井，1990)。心理学の領域では，青年心理学や社会心理学において，それぞれ独自に恋愛研究が行われてきている。

青年期において異性との関係はどのような意味をもつのであろうか。安達（1994）は，青年にとって恋人・異性の友人は，自己の安定や親密さの形成にかかわる重要なagentであると指摘している。詫摩（1986）は，青年期の恋愛にはいろいろな段階があるが，大切なことはこのような体験を通してその人自身が人間的に成長し，精神的に成熟していくことであると述べている。このように恋愛や異性との関係は，青年の心理的成長に大きな影響を与える対人関係のひとつといえる。

では，自己愛傾向の高い者の恋愛関係のあり方にはどのような特徴があるのだろうか。例えばAkhtar & Thomson（1982）は愛や性における自己愛人格像について，overtな側面の特徴として魅惑的であること，（性的）乱交，性的抑制の欠如，頻繁に夢中になること，covertな側面の特徴として愛しつづける能力の欠如，自己と分離した独立した個人としてというよりも自己の延長として愛の対象を扱うこと，ひねくれた空想，ときに性的逸脱を呈することを挙げている。またAkhtar & Thomson（1982）は，自己愛のovertな側面とcovertな側面は両側面ともに意識されるものであると指摘している。従って両側面を総合すると，自己愛的な青年の恋愛関係のあり方として，異性と頻繁に恋愛関係に陥るが，愛し続ける能力が欠如しているためにその関係が破綻しやすいといった特徴を挙げることができるだろう。また小此木（1981）は，現代に広くみられるより一般的な青年像を「自己愛人間」として記述している。そしてそのような者の愛し方や人とのかかわり方には，自己愛的同一視というメカニズムが働いていると述べている。自己愛的同一視とは，自分にかかわるものは全て良いものだとみなすような，自己愛の延長としてその対象をみなすことである。そして自己愛人間はこのメカニズムによっ

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生

て，“相手と一体であるかのように”，“愛しているかのように”，“かわいがっているかのように”，“面倒みているかのように”かかわるという。これらの知見から，自己愛傾向に関連する恋愛関係の特徴として，相手に夢中になり，自己の延長として恋愛相手をみなし，相手を理想化するなど，頻繁に異性との恋愛関係をもつ一方で，自らの自己愛的な特性のためにその関係が容易に破綻するといった特徴を挙げることができる。

近年，自己愛を様々な心理検査や質問紙により実証的に捉えようとする研究が散見されるようになっている。特にRaskin & Hall（1979）は，一般健康者も含めた自己愛傾向を測定する目的で，自己愛人格目録（Narcissistic Personality Inventory; NPI）を開発している。それ以降，自己愛の測定的研究が活発になってきており，現在までに数多くの研究がなされてきている。そして今やNPIは，青年期における自己愛的人格を研究する上で，欠くことのできないひとつの測定具（宮下，1991）となるに至っている。そしてこれまでに，青年の自己愛傾向と同性の友人関係との関連については，いくつか検討されてきている（岡田，1999; 小塩，1998a，1999）。そして近年，Campbell（1999）は自己愛傾向と異性の魅力との関連を検討する中で，1. 自己愛的な者は親密さに欠け，同時に関係をもつことによって自分の自尊心を高揚させること，2. 自己愛的な者は敵意的で自己中心的な恋愛関係というコミュニケーションのパターンを示すこと，3. 自己愛的な者は，彼らが相手を自尊心の源としてみるだけでなく，自分自身に類似した者とみるので，完璧で心配のない他者に魅力を感じることなどを報告している。

しかし，男女の関係のあり方に焦点を当て，自己愛傾向との関連を検討する研究はこれまでに行われていない。そこで本研究では，青年の自己愛傾向と異性関係のあり方との関連を検討する。さらに本研究では青年の異性との関係をより包括的に捉えるために，以下の3つの側面に焦点を当てる。

まず第1に，恋愛関係にはない，周囲の異性に対する接し方や態度の側面である。これまでに自己愛傾向は，“みんなと一緒”に“楽しく”つき合うなどの広い友人関係（小塩，1998a）や，外向性（Emmons，1984; 大石，1987; Raskin & Hall，1981; 佐方，1986），社交性（Raskin & Terry，1988）などに関連することが報告されている。また小塩（1998a）はNPIによって測定された自己愛傾向から「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3つの因子を抽出し，広くて浅い友人関係を報告する青年は「注目・賞賛欲求」得点が高く，広くて深い友人関係を報告する青年は「自己主張性」得点が高いことを報告している。また岡田（1999）は，“友だちからどうみられているか気にする”などの自己防衛的な友人関係のあり方が「注目・賞賛欲求」に関連することを示している。そこで本研究では，これらの先行研究における自己愛傾向の特徴が，異性に対する接し方や態度にもみられるのかどうかを検討する。

第2に，現在恋愛関係にある異性との関係や恋愛に対する意識の側面を取り上げる。これまで社会心理学における恋愛研究は，対人魅力の研究文脈の中で展開してきた（松井，1990）。そこでまず，類似性や衡平感など，これまでに社会心理学における対人魅力研究で指摘されてきた恋愛の発展要因に注目する。そして，その中に自己愛傾向に関連する要因がみられるかどうかを探索的に検討することを通じて，自己愛傾向の高い青年がどのような要因によって恋愛関係を発展させるのかを探る。また恋愛に対する意識として，Lee（1973，1974，1977）の恋愛類型論に注目する。Leeは恋愛に関する文献分析や面接調査の結果から，恋愛関係をMania，Eros，Agape，Storge，Pragma，Ludusの6類型に分類している（TABLE 1に各類型の特徴を示す）。Akhtar & Thomson（1982）や小此木（1981）に従えば，自己愛傾向の高い青年の恋愛意識は，恋愛相手に夢中になったり恋愛相手を理想化するなど，Eros型に近いかたちをとると予想される。

TABLE 1　Leeの恋愛類型論における各類型の特徴（松井，1993aによる）

Mania	（狂気的な愛）	独占欲が強い。嫉妬，憑執，悲哀などの激しい感情を伴う。
Eros	（美への愛）	恋愛を至上のものと考えており，ロマンチックな考えや行動をとる。相手の外見を重視し，強烈な一目ぼれを起こす。
Agape	（愛他的な愛）	相手の利益だけを考え，相手のために自分自身を犠牲にする事も，厭わない愛。
Storge	（友愛的な愛）	穏やかな，友情的な恋愛。長い時間をかけて，愛が育まれる。
Pragma	（実利的な愛）	恋愛を地位の上昇などの手段として考えている。相手の選択においては，社会的な地位の釣り合いなど，いろいろな基準を立てている。
Ludus	（遊びの愛）	恋愛をゲームと捉え，楽しむことを大切に考える。相手に執着せず，相手との距離をとっておこうとする。複数の相手と恋愛できる。

そして第3に，過去の恋愛経験や失恋経験の側面を取り上げる。松井（1993b）によると，日本の青年は失恋後に悲しみや落ち込みという消極的な気持ちが現れやすく，怒りや恨みなどの積極的な感情は起こりにくい。このように，過去の恋愛経験や失恋経験は心理面に影響を及ぼすと考えられる。また先に述べたように，自己愛的な者は頻繁に異性との恋愛関係をもつ一方で，自らの自己愛的な特性のためにその関係が容易に破綻するといった特徴をもつとされる。そこで，過去の恋愛経験・失恋経験の有無や回数と，自己愛傾向との関連を検討する。

以上のように，青年の異性関係を現在の異性に対する態度や恋愛関係，過去の恋愛経験から包括的に捉え，それらと自己愛傾向との関連を検討することが本研究の目的である。

方　法

1．調査対象・調査時期

愛知県内の大学生，専門学校生383名（男性186名，女性197名）を対象に調査を行った。平均年齢は19.61歳（男性19.91歳，女性19.31歳）であった。調査は1999年5月から6月にかけて，講義時間を利用して集団で行われた。

2．質問紙の構成

自己愛人格目録短縮版（NPI-S）　自己愛傾向を測定する尺度として，小塩（1999）が作成したNPI-Sを用いた。大石・福田・篠置（1987）はRaskin & Hall（1979）のNPIを日本語訳し，54項目からなる日本語版NPIを作成している。小塩（1997,1998a）は，この日本語版NPIを因子分析することにより，“自分が才能に恵まれており，他者よりも優れており有能である”などの強い自己肯定感をあらわす「優越感・有能感」，“自分が他者に注目されたり賞賛されることを期待する”という欲求をあらわす「注目・賞賛欲求」，“自分の意見をはっきりと言い，自ら決断する，また，やや自己中心的”な意味をもつ「自己主張性」の3因子を抽出し，これらの因子は男女共通に見いだされる因子であり，複数の被験者群においても同様の因子分析結果が得られることを報告している。そして小塩（1999）はこの3因子に対応し，より平易な表現の項目群で構成されるNPI-Sを作成している[2)]。また斜交プロクラステス法による確認的因子分析によって上記の3因子構造を確認し，これらの因子は相互に正の相関関係にあることを示している。なお本研究とは別の被験者群における，NPI-Sと大石他（1987）のNPI（54項目）との相関係数は.85（$p<.001$，$N=89$），NPI-Sと佐方（1986）のNPI（42項目）との相関係数は.81（$p<.001$，$N=89$）である。従ってNPI-SはNPIによって測定される自己愛の特性をある程度保持していると考えられる。NPI-Sは30項目（各下位尺度10項目ずつ）からなり，回答は「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの5件法で測定された。

異性に対する態度尺度　まず，専門学校生43名（全て女性，平均年齢19.44歳）を対象に予備調査を行った。予備調査は“あなたは同世代の異性に対してどのような態度や接し方をしていますか”という質問に対して自由記述により回答を求めた。そして，その記述を結果を参考に，20項目からなる尺度を作成した。本研究ではこのような手続きで作成された異性に対する態度尺度を用いた。回答は，“恋愛関係以外の，あなたと同世代の異性に対する接し方”について，「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法により測定された。

現在の恋愛状況　和田（1994）を参考に，各被調査者が現在どのような恋愛状況にあるのかについて，「恋をしていない」「片思いの人がいる」「恋人が1人いる」「2人以上の恋人とつきあっている」「一緒に住んでいる」「結婚している」のいずれかひとつに丸をつけるよう求めた。

異性関係の特質　恋人や好きな人もしくは家族以外で最も親しい異性を一人想起させ，堀毛（1994）を参考に以下の9つの質問に回答を求めた。1．相手の年齢，2．交際期間，3．相手との関係：「恋人」「ボーイフレンド・ガールフレンド」「婚約者・配偶者」「片思い」「親友」「友だち」「その他」「当てはまる人はいない」のうちひとつを選択，4．相手への熱愛度：「ほとんど熱中していない」から「とても熱中している」までの4件法，5．相手の熱愛度の認知：「ほとんど熱中していない」から「とても熱中している」までの4件法，6．性格の類似性の認知：「全く似ていない」から「とても似ている」までの5件法，7．意見や考え方の類似性の認知：「全く似ていない」から「とても似ている」までの5件法，8．衡平感：「相手が私に尽くしている」から「私が相手に尽くしている」までの5件法，9．相手とのつきあいの重要性：「全く重要でない」から「とても重要である」までの4件法。

恋愛意識　恋愛意識を測定する尺度として，松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田（1990）によって作成されたLee's love type scale second version（LETS-2）を用いた。LETS-2はLee（1973，1974，

2）NPI-Sは小塩（1998b）においても使用されている。

1977）の理論に含まれる6つの類型（TABLE 1）に対応する恋愛関係の意識を測定するために，Hendrick & Hendrick（1986）を参考にして，松井他（1990）が作成した尺度である。LETS-2は，6つの恋愛類型論に対応する6尺度57項目から構成されている。なお，本研究では6つの各類型につき5項目ずつ，合計30項目を選択して用いた。回答は，先に想起された異性について，それぞれの文章が回答者自身に当てはまる程度を，「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」までの5件法で求めた。

過去の恋愛経験　これまでの恋愛経験について，和田（1994）を参考に以下の5つの質問に回答を求めた。1. 過去数カ月の失恋経験の有無，2. 今までの失恋の回数，3. 複数の人への同時の恋の経験の有無，4. 複数の人との同時のつきあいの経験の有無，5. 今までにつきあった人数。

なお，異性関係の特質における3. の相手との関係において「当てはまる人はいない」に回答した者は，現在の異性関係と恋愛意識についての回答を求めなかった。

結　果

1．NPI-S

NPI-S30項目の得点を合計することでNPI-S総得点を算出し（平均91.05，*SD*15.10，α＝.89），NPI-Sの各下位尺度に対応する10項目ずつの得点を合計することで下位尺度得点を算出した（「優越感・有能感」平均27.26，*SD*6.20，α＝.86;「注目・賞賛欲求」平均32.82，*SD*7.30，α＝.88;「自己主張性」平均30.97，*SD*6.64，α＝.82）。3つの下位尺度全ての間には有意な正の相関関係がみられた（「優越感・有能感」対「注目・賞賛欲求」r＝.39;「優越感・有能感」対「自己主張性」r＝.49;「注目・賞賛欲求」対「自己主張性」r＝.18; 全てp＜.001，N＝383）。なお性差の検討の結果，いずれの得点についても男女で有意な得点差はみられなかった。

TABLE 2　異性に対する態度尺度の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン; N＝383）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
【消極的態度】			
8. 自分から話しかけるより，異性から話しかけられるのを待つ	.70	−.05	.09
1. 異性を前にすると緊張してしまう	.69	.05	.24
4. 異性に対して積極的な態度をとれない	.66	.14	.08
12. 異性と接するのを避ける方だ	.53	.36	−.11
14. 異性に対して自分から積極的にかかわる	−.80	.09	.23
2. 異性にも気軽に話しかけることができる	−.81	−.04	.05
【回避的態度】			
18. 異性に頼みごとをしない	−.11	.64	−.09
5. 異性には必要のないことは話さない	.15	.56	−.09
20. 異性とは距離をおいて接するようにしている	.26	.54	−.12
3. 異性には自分の弱みを知られたくない	−.12	.44	.29
13. 異性はあまり好きにはなれない	.16	.37	−.24
6. 異性に対して同性と同じように接する	−.25	−.43	−.16
16. 異性に対してあるがままの自分を見せることができる	−.04	−.53	−.11
19. 異性に対して自分の考えをはっきりと言うことができる	−.19	−.53	−.08
17. 異性に自分の悩みを相談することができる	−.03	−.75	.00
【評価懸念】			
7. 異性に好かれたいという気持ちが強い	.05	−.17	.71
11. 異性に接するときは，嫌われないかと不安になる	.10	.13	.67
15. いつも異性の目を気にしている	−.11	.12	.62
9. 多くの異性と知り合いになりたい	−.04	−.22	.55
10. 異性と接するときは気をつかう	.33	.15	.41

因子関相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	−	.64	.18
Ⅱ		−	.05
Ⅲ			−

2．異性に対する態度[3)]

(1) 因子分析

異性に対する態度尺度20項目を対象に男女込みで因子分析（主因子解・プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況から3因子解が妥当であると判断した。全分散のうち回転前の3因子によって説明できる割合は54.82%であった。TABLE 2にプロマックス回転後の因子パターンを示す。

各因子は以下のように解釈された。第1因子は6項目からなり，「自分から話しかけるより，異性から話しかけられるのを待つ」「異性を前にすると緊張してしまう」などの項目が高い正の負荷量を，「異性に対して自分から積極的にかかわる」「異性にも気軽に話しかけることができる」の2項目が高い負の負荷量を示した。この因子は，異性に対する消極的な態度をあらわす内容からなっていると考えられた。そこで，「消極的態度」因子と命名した。また第2因子は9項目からなり，「異性に頼みごとをしない」「異性には必要のないことは話さない」などの項目が高い正の負荷量を，「異性に対して自分の考えをはっきりと言うことができる」「異性に自分の悩みを相談することができる」などの項目が高い負の負荷量を示した。この因子は，異性を避け，距離をおいて接するような態度をあらわす内容からなっている。そこで，「回避的態度」因子と命名した。第3因子は5項目からなり，「異性に好かれたいという気持ちが強い」「異性に接するときは，嫌われないかと不安になる」「いつも異性の目を気にしている」などの項目が高い正の負荷量を示した。この因子は，異性に好かれたいと思い，異性からどう見られるか，どのように評価されるかを気にするといった内容からなっている。そこで，「評価懸念」因子と命名した。

得点化については逆転項目の処理をした後に，各因子に高い負荷量を示した項目の得点を合計することにより，「消極的態度」得点（平均18.82，SD5.39，$\alpha=.88$），「回避的態度」得点（平均24.22，SD6.43，$\alpha=.83$），「評価懸念」得点（平均17.23，SD3.57，$\alpha=.73$）を算出した。なお性差の検討の結果，「回避的態度」と「評価懸念」について，ともに男性の方が女性よりも得点が高いという結果が得られた（「回避的態度」男性平均24.92，SD6.35；女性平均23.57，SD6.45；t（381）＝2.06，$p<.05$；「評価懸念」男性平均17.76，SD3.45；女性平均16.73，SD3.63；t（381）＝2.84，$p<.01$）。

(2) 異性に対する態度と自己愛傾向との関連

異性に対する態度尺度の各得点とNPI-Sの各得点との間の男女込み，男女別の相関関係をTABLE 3に示す。男女込みでは，NPI-S総得点は「消極的態度」「回避的態度」と有意な負の相関，「評価懸念」と有意な正の相関を示した。NPI-Sの下位尺度をみると，「優越感・有能感」と「自己主張性」は「消極的態度」「回避的態度」と有意な負の相関を示した。また，「注目・賞賛欲求」は「評価懸念」と有意な正の相関，「自己主張性」は「評価懸念」と有意な負の相関を示した。また男女別の相関関係は男女込みの場合とほぼ同じであった。

自己愛傾向は全体として，異性に対して積極的な態度を示すことに関連していた。しかしその一方で，異性からの評価を気にする傾向にも関連することが示された。この点については，NPI-Sの各下位尺度に注目する必要がある。特に「注目・賞賛欲求」は「消極的態度」「回避的態度」と無相関であり，「評価懸念」と有意な正の相関関係にあった。また「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」は「評価懸念」との関連のし方が異なっており，「注目・賞賛欲求」は異性からの評価を気にする傾向と関連し，「自己主張性」は異性からの評価を気にしない傾向に関連することが示された。

3．恋愛関係・恋愛意識

(1) 現在の恋愛状況と分析対象の選択

まず，現在の恋愛状況をまとめると以下のようになる：「恋をしていない」169名（44.13%；男性95名，51.08%；女性74名，37.56%），「片思いの人がいる」95名（24.80%；男性38名，20.43%；女性57名，28.93%），「恋人が1人いる」110名（28.72%；男性46名，24.73%；女性64名，32.49%），「2人以上の恋人とつきあっている」5名（1.30%；男性4名，2.15%；女性1名，0.51%），

TABLE 3　異性に対する態度と自己愛傾向との関連
（N＝383）

	NPI-S			
	総得点	優越・有能	注目・賞賛	自己主張
消極的態度	−.31***	−.23***	−.02	−.47***
	−.34***	−.26***	−.05	−.48***
	−.29***	−.19**	.00	−.47***
回避的態度	−.31***	−.20***	−.06	−.45***
	−.34***	−.30***	−.06	−.45***
	−.27***	−.12	−.05	−.44***
評価懸念	.22***	.08	.53***	−.17***
	.24***	.11	.57***	−.17*
	.22**	.09	.53***	−.15*

上段：男女（383名），中段：男性（186名），下段：女性（197名）
*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

3）本結果の一部は，日本性格心理学会第9回大会において発表された。

「一緒に住んでいる」4名（1.04%；男性3名，1.61%；女性1名，0.51%）。結婚していると答えた者はいなかった。

以下の分析では，何らかの恋愛関係の状態にある者を分析対象とする。そこで，全383名中「恋をしていない」と答えた169名と回答に不備のあった4名を除く，210名（男性90名，女性120名）を以下の分析の対象とした。ここで選択された210名の平均年齢は19.72歳（男性20.12歳，女性19.42歳）であり，交際期間は平均14.66カ月（男性17.10カ月，女性12.89カ月），相手の年齢の平均は20.61歳（男性20.11歳，女性20.96歳）であった。なお，ここで選択された恋愛関係の状態にある者（210名）とそうでない者（169名）との間で自己愛傾向の各得点を比較したところ，恋愛関係の状態にある者の方がそうでない者よりも「自己主張性」得点が有意に高いという結果が得られた（恋愛状態：平均31.57，*SD*6.83；非恋愛状態：平均30.22，*SD*6.32；t（377）＝1.98，$p<.05$）。なおこの結果は，男女別に分析を行った場合でも同様であった。

(2) 異性関係の特質

異性関係の特質として測定された6変数（「相手への熱愛度」平均3.24，*SD*.75；「相手の熱愛度の認知」平均2.77，*SD*1.07；「性格の類似性の認知」平均3.09，*SD*1.25；「意見や考え方の類似性の認知」平均3.15，*SD*1.12；「衡平感」平均2.92，*SD*1.02；「相手とのつきあいの重要性」平均3.50，*SD*.64）と自己愛傾向との関連を検討した。なお，これらの6変数の性差を検討したところ，「性格の類似性の認知」について男性（平均2.84，*SD*1.24）よりも女性（平均3.27，*SD*1.23）の方が得点が高いという結果が得られた（t（208）＝2.45，$p<.05$）。これら6変数と自己愛傾向の男女込みの相関関係をTABLE 4－1に，男女別の相関関係をTABLE 4－2に示す。

TABLE 4－1に示したように，NPI-S総得点，「優越感・有能感」「自己主張性」と「相手の熱愛度の認知」との間，「優越感・有能感」と「意見や考え方の類似度の認知」との間に有意な正の相関がみられた。またTABLE 4－2に示したように，男女ともに「相手の熱

TABLE 4－1　男女込みの異性関係の特質と自己愛傾向との関連（N＝210）

	NPI-S			
	総得点	優越・有能	注目・賞賛	自己主張
相手への熱愛度	.02	.03	.01	.00
相手の熱愛度の認知	.22**	.23***	.12	.17*
性格類似性	.09	.06	.05	.10
意見・考え方類似性	.13	.16*	.04	.11
衡平感	－.09	－.06	－.03	－.11
つきあい重要性	.12	.08	.08	.13

*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

TABLE 4－2　男女別の異性関係の特質と自己愛傾向との関連

	NPI-S			
	総得点	優越・有能	注目・賞賛	自己主張
相手への熱愛度	－.06	.06	－.13	－.05
	.08	.12	.14	.02
相手の熱愛度の認知	.28**	.35***	.16	.18
	.19*	.18*	.10	.19*
性格類似性	.11	.03	.14	.09
	.05	.10	－.06	.07
意見・考え方類似性	.15	.17	.14	.05
	.11	.17	－.05	.14
衡平感	－.10	－.12	－.05	－.06
	－.08	－.03	－.01	－.14
つきあい重要性	－.07	－.02	－.14	.02
	.29**	.18*	.26*	.20*

上段：男性（90名），下段：女性（120名）
*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

愛度の認知」とNPI-S総得点，「優越感・有能感」との間に有意な正の相関がみられた。また，女性において，自己愛傾向の各得点と「相手とのつきあいの重要性」との間に有意な正の相関関係がみられた。

(3) 恋愛意識

恋愛意識と自己愛傾向との関連を検討する。まず，LETS-2に含まれる6尺度に相当する5項目ずつの得点を合計することで，Mania得点（平均17.04，*SD*4.16，$\alpha=.83$），Eros得点（平均15.26，*SD*3.88，$\alpha=.75$），Agape得点（平均13.57，*SD*4.40，$\alpha=.84$），Storge得点（平均15.53，*SD*4.23，$\alpha=.66$），Pragma得点（平均11.45，*SD*4.96，$\alpha=.84$），Ludus得点（平均13.27，*SD*4.24，$\alpha=.70$）を算出した。性差の検討を行ったところ，Pragma（男性平均9.84，*SD*4.44；女性平均12.65，*SD*4.44）とLudus（男性平均12.34，*SD*4.30；女性平均13.97，*SD*4.08）について，男性よりも女性の方が得点が高いという結果が得られた（それぞれ$t(208)=4.21$，$p<.001$；$t(208)=2.79$，$p<.01$）。

LETS-2の各得点とNPI-Sの各得点との相関関係を男女込みについてTABLE 5−1に，男女別についてTABLE 5−2示す。NPI-S総得点はEros，Pragmaと有意な正の相関関係にあった。NPI-Sの下位尺度をみると，「優越感・有能感」とEros，Pragmaとの間には正の，Ludusとの間には負の有意な相関関係が，「注目・賞賛欲求」とMania，Erosとの間に正の有意な相関関係がみられた。「自己主張性」はErosとの間に有意な正の相関関係がみられたのみであった。またTABLE 4−2に示したようにこれらの関係には男女差があり，TABLE 4−1に示したような関係は女性の場合に顕著であるといえる。その一方で，男性では「優越感・有能感」とErosの間に正の有意な相関がみられたのみであった。

これらのことから男女ともに，「優越感・有能感」はEros的な，恋愛を至上のものと考え，ロマンチックな考えや行動をとること，相手の外観を重視したり一目ぼれになりやすいなどの恋愛意識をもつことに関連するといえよう。その一方で女性においては，「優越感・有能感」はPragma的な，恋愛を地位の上昇などの手段と

TABLE 5−1　男女込みのLETS-2の各得点と自己愛傾向との関連（N=210）

	NPI-S			
	総得点	優越・有能	注目・賞賛	自己主張
Mania	.04	.00	.20**	−.11
Eros	.26***	.25***	.19**	.17*
Agape	.07	.09	.09	−.01
Storge	.10	.06	.12	.04
Pragma	.15*	.14*	.10	.09
Ludus	−.10	−.15*	−.04	−.05

*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

TABLE 5−2　男女別のLETS-2の各得点と自己愛傾向との関連

	NPI-S			
	総得点	優越・有能	注目・賞賛	自己主張
Mania	−.07	−.06	.03	−.15
	.13	.04	.32***	−.10
Eros	.17	.24*	.09	.09
	.33***	.26**	.25**	.21*
Agape	−.08	−.03	−.05	−.12
	.20*	.16	.19*	.09
Storge	.00	−.03	.08	−.07
	.18	.13	.15	.12
Pragma	.06	.08	.14	−.08
	.17	.21*	.03	.14
Ludus	.07	.05	.13	−.02
	−.28**	−.29**	−.23*	−.13

上段：男性（90名），下段：女性（120名）
*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

考えたり，恋愛相手を選択する際に社会的な地位の釣り合いなどの規準を考慮する傾向にも関連している。また女性においては，NPI-Sの下位尺度のうち「注目・賞賛欲求」はMania的な，独占欲の強さや恋愛関係の中で激しい感情をもつこと，Agape的な，相手の利益を考え，相手のためには自分自身を犠牲にするといった恋愛意識にも関連することが示された。さらに男性では有意な関連がみられなかったが，女性では自己愛傾向および「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」は，恋愛をゲームと捉えるLudus型の恋愛意識と負の関連をすることも示された。

4．過去の恋愛経験

「過去数カ月の失恋経験の有無」「今までの失恋の回数」「複数の人への同時の恋の経験の有無」「複数の人との同時のつきあいの経験の有無」「今までにつきあった人数」の5つの項目について分析を行う。なお，これらの回答は全被調査者（383名）から得られた。失恋経験の平均回数は1.91（*SD*2.11）回であり（0回～15回），つきあった異性の平均人数は2.34（*SD*2.59）人であった（0人～15人）。

これらの変数と自己愛傾向との関連を検討するために，まず，「過去数カ月の失恋経験の有無」「複数の人への同時の恋の経験の有無」「複数の人との同時のつきあいの経験の有無」による自己愛傾向の各得点とt検定の結果をTABLE 6に示す。過去数カ月の失恋経験がある者はない者よりも，NPI-S総得点と「注目・賞賛欲求」が有意に高かった。また，複数の人に対して同時に恋をした経験がある者はない者よりも，NPI-S総得点，「注目・賞賛欲求」「自己主張性」が有意に高かった。しかし，複数の人と同時につきあった経験の有無によって，NPI-S各得点に有意な差はみられなかった。なお，これらの関係は男女別に分析を行った場合についても同様であった。

次に，「今までの失恋の回数」「今までにつきあった人数」と自己愛傾向との関連を検討する。これらは具体的な回数や人数を回答しているため，「今までの失恋の回数」について0回，1回，2～3回，4回以上に，「今までにつきあった人数」についても同様に0人，1人，2～3人，4人以上に分けて，それぞれ1要因の分散分析を行った。TABLE 7に検定結果（F値とTukeyのHSD法による多重比較の結果）とNPI-S各得点の平均値，*SD*を示す。TABLE 7の結果から，失恋経験が多いほど，NPI-S総得点，「注目・賞賛欲求」「自己主張性」が高くなる傾向にあった。またつきあった人数が多いほど，NPI-S総得点と「自己主張性」得点が高くなる傾向にあった。なお，これらの関係は男女別に分析を行った場合についても同様であった。

過去の恋愛経験との関連から，男女ともに，同時に複数の人に恋をしたことがあると報告する者ほど特に「注目・賞賛欲求」「自己主張性」が高く，つきあった人数が多いと報告する者ほど特に「自己主張性」が高かった。これらは，自己愛的な青年が頻繁に異性との恋愛関係をもつことを示唆している。また男女ともに，過去数カ月の失恋経験がある者や，過去の失恋経験が多い者ほど特に「注目・賞賛欲求」が高かった。

考　察

本研究では青年の異性関係を，恋愛関係以外の周囲の異性に対する接し方や態度の側面，現在恋愛関係にある異性との関係や恋愛に対する意識の側面，過去の恋愛経験や失恋経験の側面から捉え，自己愛傾向との関連を検討した。そして結果から，自己愛傾向の各下位尺度はそれぞれ特徴的な異性関係のあり方に関連すること，また恋愛関係の状態にある場合には，自己愛傾向と恋愛関係のあり方や恋愛意識との関連が男女で異なることが示唆

TABLE 6　失恋，同時の恋，同時のつきあいの経験によるNPI-S各得点の平均値（*SD*）と検定結果

	過去数ケ月の失恋経験			同時の恋の経験			同時のつきあいの経験		
	なし	あり	t値	なし	あり	t値	なし	あり	t値
NPI-S総得点	89.87	93.71	2.31*	88.94	94.07	3.32**	90.66	94.78	1.67
	(15.35)	(14.25)		(14.94)	(14.86)		(15.16)	(14.18)	
「優越・有能」	27.25	27.30	.07	26.74	28.01	1.94	27.18	28.08	.91
	(6.30)	(5.99)		(5.92)	(6.52)		(6.25)	(5.73)	
「注目・賞賛」	32.00	34.65	3.48***	31.89	34.14	2.97**	32.74	33.59	.72
	(7.47)	(6.58)		(7.11)	(7.38)		(7.35)	(6.88)	
「自己主張」	30.62	31.76	1.55	30.30	31.92	2.39*	30.74	33.11	1.88
	(6.58)	(6.71)		(6.73)	(6.41)		(6.52)	(7.36)	
人　数	265	118		225	158		346	37	

* $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$

TABLE 7　失恋回数，つきあった人数によるNPI-S各得点の平均値（*SD*）と検定結果

	失恋回数				
	0回	1回	2～3回	4回以上	F値
NPI-S総得点	88.51 a	91.32 ab	90.85 ab	96.38 b	2.99*
	(15.06)	(13.73)	(15.85)	(14.72)	
「優越・有能」	27.27	27.38	27.09	27.50	.07
	(6.18)	(5.50)	(6.57)	(6.65)	
「注目・賞賛」	30.84 a	33.84 bc	32.51 ab	35.71 c	5.86***
	(7.20)	(6.48)	(7.80)	(6.48)	
「自己主張」	30.39 ab	30.10 a	31.24 ab	33.17 b	2.67*
	(6.77)	(6.76)	(6.53)	(6.02)	
人数	99	98	138	48	
	つきあった人数				
	0人	1人	2～3人	4人以上	F値
NPI-S総得点	86.32 a	89.94 ab	93.16 b	95.28 b	7.06***
	(14.18)	(12.26)	(15.74)	(16.34)	
「優越・有能」	26.34	26.89	28.25	27.64	1.84
	(6.20)	(5.16)	(5.94)	(7.15)	
「注目・賞賛」	31.60	32.76	32.82	34.26	2.23
	(7.18)	(6.77)	(7.30)	(7.74)	
「自己主張」	28.38 a	30.28 ab	32.09 bc	33.38 c	11.70***
	(5.89)	(6.37)	(6.61)	(6.65)	
人数	107	85	97	94	

*$p<.05$　***$p<.001$
表中のabcが異なる場合，その間に5％水準で有意差がある。TukeyのHSD法による。

された。

1．自己愛傾向と異性に対する態度

本研究では第1に，自己愛傾向と恋愛関係以外の周囲の異性に対する接し方や態度との関連を検討した。異性に対する態度尺度を作成し，自己愛傾向との関連を検討することにより，「優越感・有能感」「自己主張性」と「消極的態度」「回避的態度」との間に有意な負の相関を見いだした。また「注目・賞賛欲求」は「評価懸念」と有意な正の相関関係にあり，「自己主張性」が「評価懸念」と有意な負の相関関係にあることも見いだした。さらにこれらの関係は男女別に分析を行った際にもほぼ同様であった。

異性に対する態度のうち「消極的態度」と「回避的態度」は，自己愛傾向の各得点とほぼ同じ相関のパターンを示した。TABLE 2における「消極的態度」と「回避的態度」との間の因子間相関が r＝.64であることからも，両因子は類似した異性に対する態度であるともいえる。しかし各因子に高負荷を示した項目内容を見ると，「消極的態度」は自分から異性に接近することができず，異性からの接近を待つ態度を意味するのに対し，「回避的態度」は自分から異性との接触を意図的に回避する態度を意味するという点で異なっていると考えられる。従って，「消極的態度」「回避的態度」が「優越感・有能感」「自己主張性」と負の相関関係にあったという本研究の結果は，「優越感・有能感」や「自己主張性」の高い青年が自分から異性に対して積極的に接近するとともに，異性との接触を意図的に回避する態度をとらないことを示唆しているといえよう。

また「注目・賞賛欲求」は，自分が他者に注目されたり賞賛されることを期待するという意味をもつ自己愛傾向の下位側面である。そして，小塩（1998a）が示したように，この下位側面は他者からの評価によって容易に崩れてしまうような不安定な自己評価に関連している。TABLE 3－1およびTABLE 3－2の結果から，「注目・賞賛欲求」は「評価懸念」と有意な正の相関関係にあることが示された。「評価懸念」は異性に好かれたいと思うと同時に異性からの評価を気にするような態度を意味している。従ってこの結果は，「注目・賞賛欲求」がもつ他者からの評価に対する敏感さの特徴が，異性に対する態度にもみられることを意味しているといえよう。

2．自己愛傾向と恋愛関係

本研究では第2に，恋愛関係の状態にある被調査者を

分析対象とし，彼らの恋愛関係のあり方や恋愛意識と自己愛傾向との関連を検討した。そして，男女ともに「優越感・有能感」が「相手の熱愛度の認知」やEros型の恋愛意識に関連することを明らかにした。「優越感・有能感」は，“自分が自分を愛すること（小此木，1981）”という自己愛の最も基本的な意味に近いものと考えられる。「優越感・有能感」とEros型の恋愛意識との関連は，自分自身を愛することと異性を愛することが必ずしも排他的な関係にあるわけではないことを示していると考えられる。ただしそこには，相手から愛されるという報酬が関与しているかもしれない。恋愛相手から愛されるということは，その相手から肯定的な評価を受け取る機会に恵まれているとも考えられ，そのことが「優越感・有能感」を高め，あるいは維持しているとも考えられるからである。

また，男女別に恋愛関係のあり方や恋愛意識と自己愛傾向との関連をみると，男性ではNPI-S総得点，「優越感・有能感」と「相手の熱愛度の認知」との間，「優越感・有能感」とEros型の恋愛意識との間に正の有意な相関が見られたのみであったが，女性では自己愛傾向の各得点と「相手とのつきあいの重要性」との間に正の有意な相関，「注目・賞賛欲求」とMania型，Eros型，Agape型の恋愛意識との間に正の有意な相関，「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」とLudus型の恋愛意識と有意な負の相関がみられた。Mania型，Eros型，Agape型の恋愛意識は，比較的成熟した青年の恋愛類型であるといわれている（宮下・村山，1996）。従って本研究の結果は，恋愛関係にある女性においては，自己愛傾向が比較的成熟した恋愛意識に関連することを意味している。このことは女性において，自己愛傾向が恋愛相手とのつきあいを重要であると認識することに関連するという結果にも表れているように思われる。

また女性において，「注目・賞賛欲求」は特にMania型の恋愛意識に関連する傾向にあった。Mania型は日本の青年における恋愛の代表的な態度であると言われている（松井，1993b; 戸田，1996）。そしてこの型は，独占欲が強く激しい感情をもち，嫉妬深く，愛されていることを繰り返し確かめたがるなど，いわば恋愛相手との一体感を強く求める恋愛意識である。Mania型と「注目・賞賛欲求」との間に正の関連がみられたということは，特に女性においてそのような恋愛意識の背景には不安定な自己評価があり，他者からの注目や賞賛を得ていないとその自己評価が安定しないため，恋愛相手と一体になり，常に注意を自分に向けていてほしいといった意識が働くのではないかと考えられる。

恋愛関係以外の異性に対する態度と自己愛傾向との関連では男女でほぼ同じ結果が見いだされたのに対し，恋愛関係の状態にある被調査者を分析対象とした場合には，恋愛関係のあり方や恋愛意識と自己愛傾向との関連が男女で異なることが示された。特に，男性では女性よりも，NPI-S総得点や「優越感・有能感」が「相手の熱愛度の認知」と関連する傾向にあるのに対し，女性では男性よりも各NPI-S得点が「つきあいの重要性」や成熟した恋愛意識に関連する傾向がみられた。このことから恋愛関係において，自己愛傾向の高い男性は恋愛相手から愛されていると認知する傾向にある一方で，自己愛傾向の高い女性は恋愛相手とのつきあいを重要だと考え，恋愛相手に対して愛情を強く感じる傾向にあると考えられる。

3．自己愛傾向と恋愛経験

本研究では第3に，自己愛傾向と過去の恋愛経験や失恋経験との関連を検討した。そして，男女ともに過去数カ月の失恋経験がある者はない者よりも，NPI-S総得点と「注目・賞賛欲求」が有意に高く，複数の人に対して同時に恋をした経験がある者はない者よりも，NPI-S総得点，「注目・賞賛欲求」「自己主張性」が有意に高いことを示した。また男女ともに，失恋経験が多いほど，NPI-S総得点，「注目・賞賛欲求」「自己主張性」が高くなる傾向にあり，つきあった人数が多いほど，NPI-S総得点と「自己主張性」得点が高くなる傾向にあった。

これらの結果は，自己愛的な青年が頻繁に異性との恋愛関係をもつこと，また自己愛傾向のうち特に「注目・賞賛欲求」の高い者がより多くの失恋を経験していることを示している。このことは，Akhtar & Thomson（1982）や小此木（1981）の指摘から示唆される，自己愛的な青年が頻繁に異性との恋愛関係をもつ一方で，自らの自己愛的な特性のためにその関係が容易に破綻するといった特徴を表していると考えられる。

しかし，自己愛傾向の各下位側面の特徴から考えると，別の解釈も可能となる。まず，過去数カ月間に失恋を経験した者や失恋回数が多い者ほど「注目・賞賛欲求」得点が高いという結果は，失恋経験などのつらい経験が自己評価を不安定にし，その不安定な自己評価を補うために，他者からの注目や賞賛を求める欲求が生じるという可能性を示唆しているのかもしれない。また，失恋回数やつきあった人数が多い者ほど，「自己主張性」得点が高くなる傾向にもあるという結果も得られている。失恋回数の多さには「注目・賞賛欲求」も関連しているが，「注目・賞賛欲求」とつきあった人数の多さとの間には有意な関連はみられなかった。その一方で「自己主張性」はつきあった人数の多さに強く関連し，そのために失恋

回数の多さにも関連するのではないかと考えられる。このことは，青年が多くの異性とつきあい，様々な経験をすることが「自己主張性」の高まりに結びつくことを示唆しているとも考えられる。

4．自己愛傾向と異性関係の男女差について

本研究の課題は，自己愛傾向と異性関係のあり方との関連を検討することであった。そしてその結果には男女で差がみられるものとみられないものがあった。

まず恋愛関係にはない異性に対する態度については，自己愛傾向は全体として異性に対する積極的な態度に関連すること，「注目・賞賛欲求」は異性からの評価を気にする傾向に関連し，「自己主張性」は異性からの評価を気にしない傾向に関連することを示した。また，自己愛傾向は複数の人に対して同時に恋をした経験やつきあった人数の多さに関連すると同時に，過去数カ月の失恋経験や失恋回数の多さにも関連していた。そしてこれらの結果は男女に共通してみられるものであった。

しかし，恋愛関係のあり方や恋愛意識と自己愛傾向との関連は被調査者が男性であるか女性であるかによって異なっていた。自己愛傾向の高い男性は恋愛相手から愛されていると認知する傾向にあり，自己愛傾向と恋愛意識との有意な関連がほとんどみられない一方で，自己愛傾向の高い女性は恋愛相手とのつきあいを重要だと考え，恋愛相手に対して愛情を強く感じる傾向にあることが示された。従って恋愛関係にある場合，自己愛傾向が高い青年の異性に対する態度は男女で異なっており，特に女性は相手を愛するという能動的な恋愛をする傾向にあると考えられる。

恋愛の男女による違いについては，本研究および先行研究においていくつかの知見がある。まず本研究では，女性は男性よりも，恋愛において相手の条件を考慮するPragma型や恋愛をゲームと捉えるLudus型の得点が高いことが見いだされた。これと同様の知見は松井（1993b）も見いだしている。また先行研究では，女性は異性の友人に対する気持ちと恋人に対する気持ちを明確に区別する傾向あるのに対し，男性は両者を混同しやすい傾向にあること（Rubin, 1970; 山本，1986），女性は男性に比べ，交際が深まらないと相手への気持ちが高まらない傾向にあること（松井，1993a，1993b），別れの段階で主導権を握るのは女性であること（松井，1993a）などの知見が得られている。これらの知見から，一般的に女性は男性よりも恋愛相手にのめり込みにくく，逆に男性は恋愛相手にのめり込みやすいといった特徴があると考えられる。松井（1990）はこれと同様の特徴を，“恋愛の初期や中期においては，女性の方が男性より，関係に対する情緒的な関与が弱い”という言葉で表している。なお本研究の分析対象とされた恋愛関係にある者の交際期間は平均14.66カ月であり，大半の者が恋愛の初期や中期にあると考えられる。松井（1990）はこのような男女差の理由として，第1に女性は男性に比べて関係の主導権をもたないために関与の高まりが遅れること，第2に女性にとって結婚は重要な出来事であり，結婚に結びつく恋愛も重要な問題であるため，女性は恋愛の進展に対して男性よりも慎重で，防衛的な態度をとりやすいこと，第3に男性が主導権を握る恋愛関係の中では，女性が関係の決定権を獲得するためには，関係に対する関与を低め，関係を離脱する可能性を留保することが有効な戦略となること，という3つの仮説を挙げている。

しかし，このような恋愛における，“恋愛の初期や中期においては，女性の方が男性より，関係に対する情緒的な関与が弱い（松井，1990）”という男女差の知見は，自己愛傾向の高い男女には当てはまらないかもしれない。本論文では自己愛傾向の高い女性は相手を愛するという能動的な恋愛をする傾向にあるという知見を得ており，これは先行研究にみられるような一般的な男女の恋愛のかたちとは逆の関係にあると捉えることができるからである。

この結果について，以下の3つの解釈が考えられる。

第1に，自己愛傾向が男性性役割観に関連するという知見（小塩，1998b）に基づく解釈である。つまり，自己愛傾向の高い女性は低い女性よりも男性性役割観をもつため，恋愛関係において男性的な，能動的な恋愛のあり方や恋愛意識をもつと解釈される。一方男性の場合，もともと男性性役割観を高くもつ傾向にあるため，自己愛傾向が高くても恋愛関係においては自己愛傾向の低い男性と恋愛関係のあり方や恋愛意識にそれほど大きな差がないと解釈される。

第2に，男女ともに自己愛傾向が積極的な異性に対する態度に関連するという本研究の知見に基づく解釈である。一般に女性は恋愛関係に対する関与が高まりにくい。その一方で，自己愛傾向の高い女性は基本的に異性に対する積極的な態度をとるため，恋愛関係においてはその積極性が自己愛傾向の低い女性に比べて表面に出やすいといえるのではないだろうか。また男性の場合，もともと恋愛関係に対する関与が高い傾向にあるため，自己愛傾向の高低によってあまり差が表れないと解釈される。

第3は，自己愛傾向に関連する恋愛のあり方には，自分にかかわるものは全て良いものだとみなすような，自己愛の延長としてその対象をみなす，自己愛的同一視というメカニズム（小此木，1981）が働いているという点

からの解釈である。先行研究によると，女性は男性に比べ，交際が深まらないと相手への気持ちが高まらない傾向にある（松井，1993a，1993b)。しかし自己愛傾向の高い女性の場合，自分にかかわるものは全て良いものだとみなすため，交際の初期から相手に対する愛情をより強く感じる傾向にあると解釈される。その一方で男性の場合，もともと交際の初期から相手に対する愛情を強く感じる傾向にあるため，自己愛傾向の高低によってあまり差が表れないと考えられる。

以上のように，3つの解釈について考察したが，これらはいずれも仮説の域を出ず，本論文の結果のみからは明確な結論を述べることはできない。今後の研究ではこれらの仮説を検証する試みが必要とされよう。

5．最後に

本研究では青年の異性関係や恋愛関係と自己愛傾向との関連を検討し，その結果に基づいて考察してきた。しかし本研究のような一斉に行われた調査に基づく相関研究からは，上記で述べたような因果関係を検証したことにはならない。従って，上記のような考察はあくまでも可能性を示唆するにすぎないという点に留意する必要がある。また本研究では青年の異性関係をより広く，包括的に捉えようと試みた。そのために，異性関係の各側面における分析には，尺度の設定や男女別の分析など，綿密さに欠ける部分もある。本研究で得られた知見や示唆を一般化するためには，より詳細な実証的知見を積み重ねていく必要があるだろう。

引用文献

安達喜美子　1994　青年における意味ある他者の研究－とくに，異性の友人（恋人）の意味を中心として－　青年心理学研究，6，19-28.

Akhtar, S. & Thomson, J.A.　1982　Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, **139**, 12-20.

Campbell, W.K.　1999　Narcissism and romantic attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 1254-1270.

Emmons, R.A.　1984　Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300.

エルソン，M.（編）伊藤洸（監訳）　1989　コフート自己心理学セミナー1　金剛出版

Fromm, E.　1956　*The Art of Loving*.（フロム，E.　鈴木晶（訳）　1991　愛するということ　紀伊国屋書店）

福島　章　1992　青年期の心－精神医学からみた若者－　講談社

Hendrick, C. & Hendrick, S.　1986　A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 392-402.

堀毛一也　1994　恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル　実験社会心理学研究，**34**，116-128.

Lee, J.A.　1973　*The colours of love*. DonMills, Ontario: New Press.（Lee, 1974による）

Lee, J.A.　1974　The style of loving. *Psychology Today* (October), 43-51.

Lee, J.A.　1977　A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173-182.

町沢静夫　1998　現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理　双葉社

松井　豊　1990　青年の恋愛行動の構造　心理学評論，**33**，355-370.

松井　豊　1993a　恋愛行動の段階と恋愛意識　心理学研究，**64**，335-342.

松井　豊　1993b　恋ごころの科学　サイエンス社

松井　豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美　1990　青年の恋愛に関する測定尺度の構成　東京都立立川短期大学紀要，**23**，13-23.

宮下一博　1991　青年におけるナルシシズム（自己愛）的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係　教育心理学研究，**39**，455-460.

宮下一博・村山真澄　1996　青年における恋愛観と親子関係　千葉大学教育学部紀要，**44**，13-17.

中島啓之　1998　青年期の逸脱行動と自己愛　辻井正次（編）現代青年の理解の仕方－発達臨床心理学的視点から－　ナカニシヤ出版　Pp.169-180.

大石史博　1987　ナルシシズム的人格に関する研究 (2)　－YG性格検査との関係について－　日本心理学会第51回大会発表論文集，535.

大石史博・福田美由紀・篠置昭男　1987　ナルシシズム的人格の基礎的研究 (1)　－ナルシシズム的人格目録の信頼性と妥当性について－　日本教育心理学会第29回総会発表論文集，534-535.

岡田　努　1999　現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について　立教大学教職研究，**9**，21-31.

小此木啓吾　1981　自己愛人間　朝日出版社
小塩真司　1997　自己愛傾向に関する基礎的研究　－自尊感情，社会的望ましさとの関連－　名古屋大学教育学部紀要（心理学），**44**，155-163.
小塩真司　1998a　青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究，**46**，280-290.
小塩真司　1998b　自己愛傾向に関する一研究　－性役割観との関連－　名古屋大学教育学部紀要（心理学），**45**，45-53.
小塩真司　1999　高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連　性格心理学研究，**8**，1-11.
Raskin, R. & Hall, C.S 1979 A Narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
Raskin, R. & Hall, C.S. 1981 The narcissistic personality inventory: Alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **45**, 159-162.
Raskin, R. & Terry, H. 1988 A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.
Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
佐方哲彦　1986　自己愛人格の心理測定－自己愛人格目録（NPI）の開発－　和歌山県立医科大学進学課程紀要，**16**，63-76.
詫摩武俊　1986　青年の心理　改訂版　倍風館
戸田弘二　1996　恋愛関係の成立と進展　大坊郁夫・奥田秀宇（編）　親密な対人関係の科学　誠信書房　Pp.117-147.
和田　実　1994　恋愛に対する態度尺度の作成　実験社会心理学研究，**34**，153-163.
山本真理子　1986　友情の構造　人文学報（東京都立大学人文学部），**183**，77-101.

（2000年9月16日　受稿）

付録　本研究で用いられたLETS-2の項目

恋愛意識（LETS-2から30項目を選択）

Mania

彼（彼女）は私だけのものであってほしい
彼（彼女）が私を気にかけてくれないとき，私はすっかり気がめいってしまう
彼（彼女）には，いつも私のことだけを考えていてほしい
彼（彼女）が私以外の異性と楽しそうにしていると気になって仕方がない
彼（彼女）とケンカをすると，不安や心配でやつれてしまう

Eros

彼（彼女）と私は，お互いに出会うためにこの世に生まれてきたような気がする
彼（彼女）といると甘くやさしい雰囲気になる
彼（彼女）と私は，外見的にうまく釣り合っている
彼（彼女）と私は会うとすぐにお互いひかれあった
彼（彼女）と一緒にいると私たちが本当に愛し合っていることを実感する

Agape

彼（彼女）が苦しむくらいなら，私自身が苦しんだ方がましだ
彼（彼女）の望みをかなえるためなら，私自身の望みはいつでも喜んで犠牲にできる
私は（彼女）のためなら，できないこともできるようにしてみせる
彼（彼女）のためなら，私はどんなことでも我慢できる
私は彼（彼女）のためなら，死ぬことさえも恐れない

Storge

私たちの友情は，時間をかけて次第に愛へと変わった
私は彼（彼女）との友情を大切にしたい
彼（彼女）との交際が終わっても，友人でいたいと思う
長い友人づきあいを経て，彼（彼女）と恋人になった
彼（彼女）とは，友人関係から自然に恋人関係へと発展した

Pragma

恋人を選ぶときには，その人が私の経歴にどう影響するかも考える
恋人を選ぶとき，その人は将来性があるだろうかと考えてみる
恋人を選ぶとき，その人の学歴や育ち（家柄）が，私と釣り合っているかどうかを考える
恋人を選ぶときには，その人に経済力があるかどうかを考える

恋人を選ぶとき，その人とのつきあいは，私の格（レベル）を下げないかと考える

Ludus

彼（彼女）が私に頼りすぎるときには，私は少し身を引きたくなる

私が必要だと感じたときだけ彼（彼女）にそばにいてほしいと思う

彼（彼女）とはあまり深入りせず，すっきりした関係でありたい

交際相手から頼られすぎたりベタベタされるのが嫌である

私は彼（彼女）にあれこれと干渉されると，その人と別れたくなる

ABSTRACT

Narcissism and Relationships with the Opposite Sex in Adolescents

Atsushi OSHIO

In this paper, I investigated the relationship between narcissistic personality and present or past interpersonal experiences with the opposite sex. Subjects were 383 students (mean age 19.61 years). They were asked to rate their attitude to the opposite sex, their present heterosexual relationships, the six love styles based on J. A. Lee's theory (1973, 1974), and their past experiences of romantic love. The narcissistic personality inventory short version developed by Oshio (NPI-S; 1999) was also conducted. The NPI-S contains three subscales: a sense of superiority and competence (SC), need for attention and praise (AP), and self-assertion (SA).

The results were as follows: First, SC and SA were relevant to close relationships with the opposite sex, while AP had relevance to hypersensitivity to an evaluation from the other sex. Secondly, the NPI-S and SC showed significant, positive correlations with Eros and Pragma, and SC showed significant, negative correlations with Ludus. AP was positively correlated with Mania and Eros. SA was positively correlated with Eros. These relationships were typical of females. Thirdly, those who were disappointed in love in the last few months reported higher scores on AP than those who weren't. Those who have dated with more people reported higher scores on SA.

Key words : narcissism, attitude to the opposite sex, heterosexual relationship, past disappoints in love, adolescence